様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年６月１０日現在

機関番号：３１１０４
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０１７２

研究課題名（和文）　近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響・周作人の日本文学受容をめぐって

研究課題名（英文）　The Influence That Japanese Literature Gave in Modern Chinese Spoken Language Prose
—In Regard to Zhou Zuoren's Reception of Japanese Literature—

研究代表者
顧　偉良（GU WEILIANG）
弘前学院大学・文学部・教授
研究者番号：５０２３４６５４

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、以下の三つの方面で考察した。研究成果は、中国国内、及び日本国内に発表した。
（一）1920 年代に北京で起きた「排日」の風潮に関する社会的背景を考察し、そして周作人の提起した日本文化研究の必要性を検証した。
（二）民国初期の通俗文学について、周作人の文学理論の展開を論じる。
（三）日本の近代口語詩に影響を受けた周作人の口語詩実験を検証した。

研究成果の概要（英文）：I examined this research theme in the following three aspects. The results of the research were announced by China and Japan.
1. I considered the social background contributing to the trend of "the exclusion of the Japanese" in Beijing in the 1920s, and I appraised the need of the Zhou Zuoren submitted.
2. I surveyed the popular literature of the early period of the Republic of China. I discussed the development of the literature theory of Zhou Zuoren.
3. I assayed a colloquial style poem experiment by Zhou Zuoren affected by a Japanese modern colloquial style poem.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２００９年度	900,000	270,000	1,170,000
２０１０年度	400,000	120,000	520,000
総　計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：日本近代文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：周作人の日本文学受容、日本文化研究の提起、周作人と武者小路実篤

１．研究開始当初の背景

（１）本研究課題は、1910 年代後半、1920 年代における周作人の文学活動を系統的に捉え、周作人の評論活動、新詩実験、小品文

の提唱をめぐってその全貌を明らかにしようとする。また、周作人によって日本文化研究の必要性が提起された時代的背景をふまえ、周作人の日本文化に関する論述、彼の文学実践を捉え直して再評価したいと考える。

（２）研究期間内に本研究の課題をめぐって、三つの面で以下の考察をした。

①周作人の提起した日本文化研究の必要性、「排日」の風潮、及びその社会的背景を考察する。②「鴛鴦胡蝶派」をめぐる民国初期の通俗文学を検証して、「鴛鴦胡蝶派」の文学主張と周作人の新文学理論の展開を解明したい。③周作人の新詩実験と日本の口語自由詩、及び俳諧文学の独創性と小品文の提唱との関係を通して、近代中国の口語散文に与えた日本文学の口語自由詩などの影響関係を検証する。

２．研究の目的

本研究課題は、近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響に着目し、周作人の日本文学受容を検証することである。中国の口語散文の発展は、1918 年から新詩運動の中で日本の口語自由詩が紹介され、明治新文学と出会った。周作人による日本文学の翻訳、特に俳諧文学の発見は、中国新文学に斬新な表現力を持たせる画期的な意義があった。周作人の日本文化に関する論及は多岐にわたるが、雑誌『毎週評論』などを通して、1920 年代に於ける日本に対する中国社会の一般世論と、文化人としての周作人の考えとを解明したい。

３．研究の方法

（１）本研究課題が許可された後、知人を通じて北京在住の周作人親族、及び魯迅の息子周海嬰氏に連絡してもらった。二〇〇八年九月一日から十八日まで、北京魯迅博物館、紹興魯迅記念館、上海魯迅記念館の研究調査を行った。北京で周作人家族、周海嬰氏とのインタビューをし、また 1950 年代に日本文学翻訳の仕事で周作人とよく接触した作家蕭乾夫人文潔若氏を訪問した。

周作人親族を訪問する前に、まず魯迅博物館元副館長陳漱渝氏を訪ねた。陳氏からは、八〇年代以降の周作人研究について語ってくれた。七十年代の後半、周豊一氏（周作人の長男）より、当時の共産党総書記胡耀邦氏に周作人名誉回復に関する趣旨の書簡を送ったが、胡耀邦氏は、「読書甚だ少く、専門家で研究すべし。」として、関係部門に指示を出したとのこと。その後、関係部門から陳漱渝氏へ胡耀邦氏の指示が伝えられた。それ以降、一九八〇年代初期に二回にわたるシンポジウムが行われ、二回とも陳漱渝氏が企画した。一回目は、北京で魯迅と周作人の比較研究をめぐるシンポジウムが行われ、二回目は、敵偽時期（すなわち日本軍の北京占領期）の周作人の思想と文学についての討論会が行われた。これをきっかけに、国内の周作人研究は徐々に軌道に乗り、次々と研究成果が現れた。

（２）周海嬰氏とのインタビューは周氏自宅で行われた。周氏兄弟の関係を考慮して、周作人のことに触れず、魯迅の思い出、魯迅翻訳全集刊行、及び魯迅夫人許広平氏について尋ねた。周海嬰氏は、上海時代の幼年の思い出、及び魯迅の思い出などを語ってくれた。文革中の許広平氏の死については詳しく触れた。

周作人親族とのインタビューは、張菱芳女史（周作人長男周豊一氏の妻）の自宅で行われる。応接間に並んでいる魯迅と周作人の肖像は印象的であった。この日、張菱芳女史の三人娘も揃って居た。インタビューの話題は、周作人日記集、書簡集の出版などをめぐって

多岐に分かれる。また、一九二八年に周作人の翻訳した森鷗外の自伝的作品『キタ・セクスアリス』（中国語訳「性的生活」、断片）についても触れた。張菼芳女史は、文革中に悲惨な死を遂げた周作人のことについて触れ、筆者に語ろうとしたが、涙ぐんで口を噤んでしまった。

（３）面談の中で張菼芳女史から、中国の平民教育の創始者である晏陽初氏について紹介してくれた。周作人も当時、河北省定県へ平民教育が行われた場所を訪ねたことがある。報告者は日本に戻ったあと、早速、晏陽初氏の従兄の孫、晏鴻国氏（四川省巴中晏陽初博士史跡館館長）に連絡した。晏鴻国氏から、次の内容のメールが届いた。

「晏陽初先生が定県実験を実施する時、多くの知識人を集めたが、例えば孫伏園、熊佛西、黎錦晖等多くの文学芸術界の文士も参加してくれた。私が持っている資料には、晏陽初から、許地山を河北省県政改革研究院指導員として招聘する文書もあった。ただしその他の資料には、許地山が平民教育会に実際に関わったという記載が残っていない。当時の平民教育会の行った実験には国内外の多くの学者の注目を集めた。周作人先生は、1934年定県を訪れたことがあり、彼の「保定定県の訪問記」が『国聞週報』（第12巻第一期、1935年1月1日、天津）に掲載。ただ周作人が平民教育会の活動に参加したかどうかについては、いまのところそれを証明する資料が存在していない。」、と。

（４）2009年夏、報告者は、北京で三つの講演を行った。①「大江健三郎と日本の戦後文学をめぐって」（中国現代文学館、2009.8.30、講演録は、『中国現代文学館演講録系列叢書——在文学館聴講座』に収録予定）、②「核時代の文学——巴金・大江健三郎」（北京市朝陽区図、2009.9.13）、③「生命と創作——巴金・蕭乾・大江健三郎」（中国人民大学新聞学院、2009.9.16）。講演終了後、平民教育実験地の定県へ調査に行く予定だったが、体調不良で取りやめた。北京講演の際、2008年夏会えなかった周作人の孫周吉宜氏と会って、武者実篤小路に寄贈した周作人の記念品などをめぐっていろいろと話し合った。日本に戻った後、入手困難な雑誌『新しき村・周作人特集号』（第44巻第8号、平成4年8月）を手に入れた。

４．研究成果

（１）2008 年夏、中国国内の研究調査を終え日本に戻った後、2008年10月18日、シンポジウム「一九二〇年代の日本と中国——魯迅と周作人」（日本学術振興会）弘前学院大学で行われた。顧偉良（研究代表者）の報告「周作人の散文世界におけるユートピアの精神をめぐって」（コメンテーター：李梁〔弘前大学准教授〕）、小川利康（早稲田大学教授）の報告「周作人と松枝茂夫　雑誌『近世庶民文化』掲載の逸文をめぐって」（コメンテーター：長堀祐造〔慶応義塾大学教授〕）が行われた。シンポジウムは、第Ⅰ部、第Ⅱ部に分かれる。

第Ⅰ部では、08年9月に北京等地で行った訪問調査をふまえ、周海嬰（魯迅の息子）、周作人の家族とのインタビュー、また北京魯迅博物館、紹興魯迅記念館、上海魯迅記念館での訪問調査について報告した。報告後、北京での周作人親族や周海嬰等の訪問スライドを見せた。

第Ⅱ部では、武者小路実篤「新しき村」の思想受容をめぐる周作人の一九二〇年代以降の精神遍歴について考察した。小川利康の報告では、周作人・松枝の往復書簡を整理す

る過程で発見した幾つかの興味深い事実を踏まえ、『近世庶民文化』に掲載された松枝茂夫と周作人の戯文を取りあげ、古川柳の中でバレ句（性にまつわる題材を取り上げたもの）を専ら扱う雑誌になぜ二人は興味を持ち、その背景にはどんな思想が見出せるかについて検証した。最後に、長堀祐造（慶応義塾大学教授）氏は、魯迅について触れた。

中国国内の研究調査、及びシンポジウムの報告を、論考「周作人におけるユートピアの精神」（『弘前学院大学文学部紀要第 46 号』、53－65 頁、2010 年 3 月）にまとめた。

（２）2008 年夏の研究調査を通じて、中国国内の周作人研究状況を、ある程度把握したうえ、筆者自身の研究構想をまとめ、中国国内にも発信する必要があると考えた。そこで、拙稿「浅析周作人的思想与文学方法（一）」（『紹興魯迅研究 2009』、167～179 頁、紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社、2009 年 9 月）を投稿した。掲載後、編集者からの連載要望が来た。前稿に続いて、「浅析周作人的思想与文学方法(二)――《小河》的乌托邦思想及其他」（『紹興魯迅研究 2010』、139～155 頁、紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社、2010 年 10 月）を発表した。そして、三回目の連載「浅析周作人的思想与文学方法（三)――詩体模倣与俳諧趣味」（『紹興魯迅研究 2011』、紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社、2011 年 9 月刊行予定）も決まった。

論考「浅析周作人的思想与文学方法(二)《小河》的乌托邦思想及其他――」に於いては、1920 年代に於ける周作人の新詩実験をめぐって武者小路実篤の口語自由詩との影響関係について論じている。論考「浅析周作人的思想与文学方法（三)――詩体模倣与俳諧趣味――」に於いては、雑誌『新しき村・周作人特集号』（第 44 巻第 8 号、平成 4 年 8 月）に掲載された周作人の詩作品について触れ、俳諧文学の翻訳と小品文との関係について論じている。周作人は小林一茶の翻訳を通じて、一茶の俳句に於ける宗教的とも言える「救済」の観点に共鳴を覚え、それを自らの文学思想にも応用しようとしたのである。人間を万物の霊長と看做さない一茶の文学観は、ある意味で独特な世界観を持っている。一茶に着目した周作人は、日本の俳諧文学に於ける宗教性、及び日本文化の独自性に対する理解につながっている。

なお、『紹興魯迅研究』に掲載された研究論文は、ともに日本学術振興会科学研究費補助金によるものと明記した。

（３）以下は、日本国内で発表されたものである。

「近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響（一）――周作人の日本文学受容をめぐって」（『弘学大学語文第 36 号』、弘前学院大学国語国文学会編、2010 年 3 月）に於いては、ジャンルとしての小品文に着目して、周作人の新詩実験をめぐる武者小路実篤との思想交流および詩集『過去の生命』とロマン主義について検証した。特に武者小路実篤の周作人宛の書簡「支那未知の友へ」（全集未収録）をめぐって、両者の思想交流について触れた。そして、周作人の新詩「小河」について発見された新しい資料を提示して今までにない視点で論じた。武者小路実篤の口語自由詩「小さな川よ」と周作人の「小河」とを読み比べると、周作人の散文詩「小河」には、ある種の自然尊重に対する生命思想が現れているのに対し、武者小路の「小さな川よ」は、明らかに「俺」の自我拡大を感じさせることができる。そのなかで、自然の川の雄大さが示されるというよりも、「大きな川」は擬人化された「小さな川」の夢として表現されている。その「夢」のなかに「俺」の志向性が隠されている。武者小路は夥しい自由

詩を発表したが、その特徴の一つは、思想詩的傾向が著しかった。その口語自由詩のスタイルは、確かに周作人に新風を吹き込んだと思われるが、文学趣向や思想面で言えば、周作人と武者小路実篤とは、根本的に異なる性質をそれぞれ持っていた。

中国の新文化運動期において、同時代の文学現象としてもっとも目立ったのが伝統文学の否定および「個性」の解放であった。それと共に詩において「絶対的自我」の主張や表現が顕著に現れてきた。これに対し、理知を重んじる周作人は、新文化運動期に他の文学者とは異なる独自の道を歩んでいった。周作人が重要視したのは、ジャンルとしての小品文であり、つまり「知」としての文化テクストの生産であった。

（４）「近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響（二）――周作人の日本文学受容をめぐって」（『弘学大学語文第 37 号』、弘前学院大学国語国文学会編、2011 年 3 月）に於いては、一九二〇年代に於ける周作人の文学活動に着目して、①民国初期の文学諸事情、②新文学運動の推進および評論活動、③「排日」風潮および日本文化研究の提起をめぐって、周作人の批評、翻訳活動について考察した。

周作人は日本留学中に、柳田国男、柳宗悦等から文化に関する研究方法を学んだことによって、比較的若い頃に文化的感覚のセンスを身につけた。そして、日本には固有の文明があるのにいち早く気づいた。のちに日本文化をめぐる批評活動、または自国の儒教文化に対する批判において精神的ゆとりを見せた。そういった精神が「排日」風潮に対して一学者として示された高い見識にも投影されている。文化上に示される彼の柔軟な精神は、周作人の新文学草創期における評論活動を支える原動力であると思う。またその精神は散文小品の世界にも融け込んでいる。そのような寛容精神の持ち主である周作人は、「親日派」というよりも、寧ろ「知日派」と言った方がより適切かも知れない。前者は成るには容易だが、後者は思想なしには成れない、と歴史の経験から教えてくれている。

周作人の文学生涯には、啓蒙思想、理想主義、コスモス精神、および中国伝統文人の反骨精神が介在しているが、時代ごとにそれらの精神が発揮された。激動たる時代を幾つも経験した彼の終生から離れなかったのは、やはりギリシア文学及び日本文学の翻訳であった。周作人の場合、新文学草創期に主体と客体という二項対立を越える経験から崇高なる言語的経験（日本の俳諧文学との出会いを含めて）を経て、散文小品の源流である小品文の境地に到達したのである。

本研究は、「周作人研究」の序の口に立っているに過ぎなかった。これから、俳諧文学から枝分かれした写生文と中国の小品文との比較、および周作人と柳田国男、永井荷風、谷崎潤一郎、戸川秋骨をめぐって検証したいと考える。これらの考察を終えた後、「周作人研究序説」としてまとめたいと考えている。貴重な研究機会を与えてくれたことに対し、あらためて感謝の意を表する次第である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響――周作人の日本文学受容をめぐって――（二）

<u>顧偉良</u>

『弘学大学語文第 37 号』左 5～左 30 頁

弘前学院大学国語国文学会編、2011年3月

② 浅析周作人的思想与文学方法(二)

――《小河》的乌托邦思想及其他
顧偉良
『紹興魯迅研究 2010』、139～155 頁
紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社
2010 年 10 月

③ 周作人におけるユートピアの精神
顧偉良
『弘前学院大学文学部紀要第 46 号』
53－65 頁、2010 年 3 月

④ 近代中国の口語散文に与えた日本文学の影響――周作人の日本文学受容をめぐって――（一）
顧偉良
『弘学大学語文第 36 号』
左 6 頁－左 23 頁、弘前学院大学国語国文学会編、2010 年 3 月

⑤ 浅析周作人的思想与文学方法（一）
顧偉良
『紹興魯迅研究 2009』、167～179 頁
紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社
2009 年 9 月

⑥ 浅析周作人的思想与文学方法（三）
――詩体模倣与俳諧趣味――
顧偉良
『紹興魯迅研究 2011』
紹興魯迅記念館編、上海文芸出版社
（2011 年 9 月刊行予定）

〔学会発表〕（計 1 件）

シンポジウム（場所：弘前学院大学、2008 年 10 月 18 日）
一九二〇年代の日本と中国
――魯迅と周作人（日本学術振興会）
発表者：顧偉良（研究代表者）
周作人の散文世界におけるユートピア精神
コメンテーター：李梁（弘前大学准教授）

小川利康（早稲田大学教授）
周作人と松枝茂夫――雑誌『近世庶民文化』掲載の逸文をめぐって
コメンテーター：長堀祐造（慶応義塾大学教授）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
顧　偉良（GU WEILIANG ）
弘前学院大学・文学部・教授
研究者番号：50234654

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし